

## 第31回日本臨床環境医学会学術集会参加レポート

水越厚史

近畿大学医学部環境医学・行動科学教室 〒589-8511 大阪府大阪狭山市大野東377-2

Report on the 31st Annual Meeting of The Japanese Society  
of Clinical Ecology

Atsushi MIZUKOSHI

Department of Environmental Medicine and Behavioral Science, Kindai University Faculty of  
Medicine, 377-2 Ohno-higashi, Osakasayama, Osaka 589-8511, Japan

## 1. はじめに

2023年6月24日（土）、25日（日）に開催された第31回日本臨床環境医学会学術集会に参加いたしました。室内環境学会と日本臨床環境医学会は、毎年、互いに後援して、学術大会、学術集会を開催していますので、大変関係の強い学会です。そのため、室内環境学会の会員の皆様のなかにも参加された方が多くいらっしゃるかと存じます。参加したてのほやほやの状態ですが、早速、ご報告させていただきます。なお、実行委員長も務めさせていただきましたが、参加者として、感じたことを述べさせていただきますと思います。

開催地は大阪で、会場は、近畿大学東大阪キャンパスの11月ホールでした。2009年の室内環境学会学術大会と同じ会場でしたので、覚えている方もいらっしゃるかもしれません。今学術集会の会長は、室内環境学会の理事長の東賢一先生で、2009年の室内環境学会学術大会の大会長もされています。両方参加された方は、当時と変わらず活気のある学生街とキャンパスに懐かしさを感じると同時に、キャンパス内になんだか不思議な形の建物もできていて、驚きも感じられたのではと思います。なお、オンラインでの配信もあり、オンラインでご参加された方もいらっしゃるかと思います。

## 2. 講演内容

今回の学術集会のテーマは、「次世代の健康社会を実現する環境に向けて」であり、口頭発表が34件、ポスター発表が10件、特別講演が2件、シンポジウ

ムが2件ありました。口頭発表とポスター発表は、全部で9セッション（「化学物質・微生物・におい」、「感染」、「社会」、「物理的因子（電磁波・動揺病）」、「香害・消毒剤」、「疫学・治療」、「国際」、「心理・生活環境・作業環境」、「環境過敏症」）あり、非常に広範囲の内容でした。時間的な重複はなく、全ての講演を2日間で聴講できるプログラムとなりました。

特別講演やシンポジウムを時系列で紹介すると、まず1日目に、特別シンポジウムがありました。学術集会のテーマ「次世代の健康社会を実現する環境に向けて」に「現在と未来」という副題がついたテーマで、4名の先生がご講演されました。最初に、東邦大学医学部の道川武紘先生により、産科合併症に着目した環境汚染物質の妊婦への健康影響についてお話いただき、次に、京都大学大学院医学系研究科の金谷久美子先生により、黄砂・PM2.5の妊婦や子どものアレルギー症状への影響についてお話いただきました。そして、熊本大学大学院生命科学研究部の盧溪先生により、化学物質過敏症の個体要因とパーソナリティについて、QEESI質問票を用いた共分散構造分析により解析した結果についてお話いただきました。最後に、大阪大学大学院工学研究科の近藤明先生により、室内外の化学物質濃度から発生源を推定する手法についてお話いただきました。以上のように、様々な視点から次世代の環境について、これからの展望も含めてご教授いただきました。

2日目は特別講演が2件あり、午前、近畿大学総合社会学部の漆原宏次先生により、海遊館とコラボ

して行われた水族館展示映像がもたらす心理的効果についてお話しいただきました。また、午後は、近畿大学病院がんセンターの阪本亮先生により、吉本興業とコラボして行われている笑いの医学的検証についてお話しいただきました。2つの講演とも、近畿大学で行われている、環境が人に与える良い影響についてのお話で、よりよい健康社会の実現に向けて、大変、示唆に富む内容でした。その後、国際セッションに続き、日台国際交流シンポジウムが、「日本と台湾の環境過敏症患者の現状と病態解明・発症予防に対する今後の展望」というテーマで開催されました。まず、東北大学大学院の北條祥子先生により開会の挨拶があり、台湾から、New Taipei Municipal TuCheng HospitalのLi-Chen Chen先生により台湾におけるアレルギー疾患の現状について環境の視点からお話いただき、National Health Research InstitutesのShau-Ku Huang先生により台湾の経験に基づくアレルギー疾患に対する環境影響の多面的調査とその緩和計画についてお話しいただきました。日本からは、北條祥子先生により、疫学からみた日本の環境過敏症の現状と今後の展望についてお話しいただき、湘南鎌倉総合病院の渡井健太郎先生により、遺伝学的手法を用いた環境過敏症の病態解明として、ゲノムワイド関連解析と腸内細菌叢解析についてお話しいただき、帝京大学附属溝口病院の黒岩義之先生より脳科学者からみた環境過敏症の発症メカニズム仮説と今後の展望についてお話しいただきました。最後に、日本臨床環境医学会の理事長の坂部貢先生より閉会の挨拶がありました。日台両国の最新の知見の情報交換がなされ、今後この分野の研究が国際的に発展していく礎となる兆候を感じることができました。



Fig. 1 Word cloud with frequent words for themes, session names, and presentation titles

テーマ、セッション名、演題名の頻出語を基に、ワードクラウドを作成すると、Fig. 1のようになりました（NVivo Release 1.7.1, Lumivero, Denver, CO, USA）。環境を中心に、過敏や化学物質、健康などが配置されていますが、その他様々なワードが含まれていて、当学会の多様性、担っているものの広さが視覚化されていると思いました。英単語も含まれていて、国際セッションや日台国際交流シンポジウムもあったことによると考えられます。これだけの内容を含む学会は、他に類を見ないのではないのでしょうか。

### 3. 懇親会の開催

そしてなんとといっても、今年は懇親会が、久しぶりに開催されました。なんと近大だけに、近大マグロの解体ショーもありました。鯖達人の肩に担がれて近大マグロが入場し、会長の東先生により、ケーキならぬマグロ入刀式が行われました（Fig. 2）。ショーでは、マグロにまつわる色々な興味深いお話

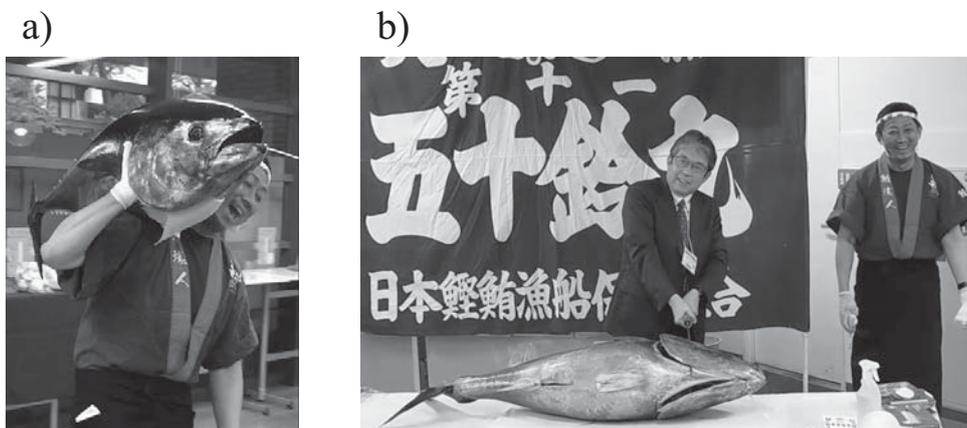


Fig. 2 Kindai Tuna entering (a) and tuna knife by Conference President Prof. Azuma (b)

とともに、刀のような包丁による見事なさばきを見ることができました。懇親会のような少し砕けた場で、興味深いショーも見つつ、面と向かって、研究や互いの近況などについて話をすることが重要であると、改めて実感しました。

#### 4. おわりに

以上のような内容で、あっという間の2日間でした。コロナ禍を経て、学会も徐々に元の姿を取り戻しつつあることを感じました。そして、実際に皆さんとお会いして議論をすることで、同じ目標に向かって研究をしているということを再認識することができました。日本臨床環境医学会は、幅広い分野の内

容に取り組んでいると同時に、実際に苦しんでおられる患者の方がいらっしゃるため、より切実な問題を対象としています。それでも学会集会で集まって議論することによって、前向きに一丸となって取り組もうという雰囲気が醸成されたように感じました。学会の益々の発展を祈りつつ、また参加できるよう頑張ろうと、身の引き締まる学会参加となりました。次回、第32回日本臨床環境医学会学会集会は、くらしき作陽大学食文化学部の中野雅仁先生が会長で、2024年6月8日（土）、9日（日）（予備日6月15日（土）、16日（日））に、くらしき作陽大学にて開催される予定です。